研　　究

母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連

原口由紀子[1)]，松浦　治代[1)]，矢倉　紀子[1)]
佐々木くみ子[1)]，笠置　綱清[1)]

〔論文要旨〕

母親自身が持つ3側面（家庭人としての自分，社会人および職業人としての自分，個人としての自分）の理想と現実の構成割合に生じたギャップと育児不安の関連について，幼児をもつ母親842名を対象に調査を行った。結果，現実自己と理想自己の構成割合に大きなギャップが存在し，「家庭人としての自分」の構成割合で現実が理想を上回れば上回るほど，一方，「個人としての自分」の構成割合で現実が理想を下回れば下回るほど、育児不安が喚起されやすいという傾向が明らかとなった。以上より，母親の子育ての負担を現実的に軽減する手段を講じながら，母親たちの多様な生き方が認められる社会のしくみづくりの必要性が示唆された。

Key words：育児不安，母親，現実自己，理想自己

Ⅰ．目　　的

「育児不安」は，1970年代後半から1980年代の前半にかけて，牧野[1)]らによって指摘されてきた。この概念は，現代の社会状況の問題点を把握し，親子関係を親に視点をおいて検討することに役立つ概念である。この研究以後，子どもの発達に最も重要な影響を与えると考えられる母親の育児不安に関連した要因の検討に関する研究が繰り返し行われてきた。さらに，親や子の生活をめぐる近年の社会的状況の変化に応じて，「親としての発達」という，個人としての生涯発達的視点から親を研究する方向が生まれてきた。

柏木[2)]は，80年余に及ぶ長い一生のうち子育てはほんの一時で，女性＝母親・妻ではもはや幸福な一生とはならないということの予測から生じる，現代女性の心の変化を指摘している。

従って，今日の母親たちの生き方として，「自分で子育てしたい」と同時に，「自分の生き方も大切にしたい」という葛藤が生じる傾向が高いと考えられる。また，その結果，「母親の現実の生活（現実自己）」と「母親の望む自分のあり方(理想自己)」との間に生じたギャップが，育児を肯定的に捉えることを困難にさせ，育児不安などのネガティヴな感情を喚起する重要な要因となっていることが推察できる。

そこで，本研究の目的は，育児不安に関連する直接的な影響要因に主眼を置くだけではなく，現代の母親たちの内面に生じた，「自己のもつ側面」の現実自己と理想自己とのギャップと育児不安との関連について検証を行うことである。

Ⅱ．研究方法

1．対象と方法

鳥取県A市の2つの幼稚園に通園している幼児を持つ母親442名と，A市子育て支援センター

The Relationship between Mother's Individual Lives and Their Child-care Anxiety　〔1659〕
Yukiko HARAGUCHI, Haruyo MATSUURA, Noriko YAKURA, Kumiko SASAKI, Tsunakiyo KASAGI　受付 04. 9.17
1）鳥取大学医学部保健学科（研究職）　採用 04.12.17
別刷請求先：原口由紀子　鳥取大学医学部保健学科　地域・精神看護学講座
〒683-0826 鳥取県米子市西町86
Tel：0859-34-8444　Fax：0859-34-8358

Presented by Medical*Online

の開放日に来所した，乳幼児を持つ母親400名の計842名を調査対象とした。回収率は幼稚園が88.7%(392名),子育て支援センターが66.3%(265名）で，計657名を分析対象とした。

幼稚園では，各園を通じて各家庭に自己記入式調査用紙を配布し，任意回答した調査用紙を約10日後に各園で回収した。また，子育て支援センターでは，来所時にセンターを通じて調査用紙を配布し，対象者がその場で記入し回収を行った。調査期間は2002年7月末から10月末までである。

倫理的配慮として，研究協力の依頼文に，研究目的，方法，守秘義務（個人が特定されないこと），研究協力および協力拒否が可能であることを明記した。回答用紙は無記名とし，記入後は本人が封をした状態で回収できるようにした。

2.　質問紙の構成

対象者の属性，育児不安尺度，自己の３側面の割合（現実自己と理想自己）

1)　育児不安尺度

田中[3]が作成した，信頼性，妥当性が確認されている尺度を用いた。10項目から構成され，「よくある」から「まったくない」の４件法で評定した。４～１点に得点化し，合計40点満点の「育児不安得点」として分析に用いた。

2)　自己の３側面（現実自己と理想自己）

柏木の著書[4]に引用され，上野が作成した（未発表）図を参考に，「自分」にはどのような側面を，どれほどの割合でもっているかを尋ね，「家庭人としての自分」「社会人および職業人としての自分」「個人としての自分」の３側面の現実自己と理想自己の割合を，円グラフ上に，回答者自身で線を引いてもらい，それぞれの角度を測定し量的データとした（**表１**）。

なお，本研究の解析には統計ソフトパッケージSPSS11.0を使用した。

Ⅲ．結　　果

1.　対象の特徴

母親の年齢は,30～34歳が40.3%で最も多く，ついで35～39歳が28.9%，25～29歳が20.2%，24歳以下が2.3%，40歳以上が8.2%であった。子どもの数は，２人とした母親が50.7%で，１人が29.2%，３人が18.0%であった。第１子の年齢の内訳は，5歳以上が51.4%で，３歳以上５歳未満が24.2%，１歳以上３歳未満が17.4%，１歳未満が3.5%であった。家族形態は，核家族が64.1%を占め，同居は34.9%であった。

就業の形態をみてみると，専業主婦が63.5%であり，就業している者のうち，フルタイムが9.1%で，パートタイムが14.0%であった。平成13年総務省統計局の「労働力調査」[5]の同じ

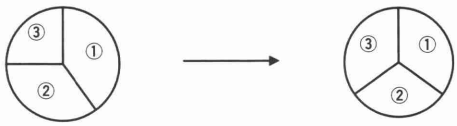
表１　自己の３側面（現実自己と理想自己）のアンケート内容の実際

＜質問項目＞

自分には現実でどのような面がありますか。理想はどうですか。
家庭人の自分，社会人および職業人としての自分，個人としての自分の占める割合を線で分けてください。

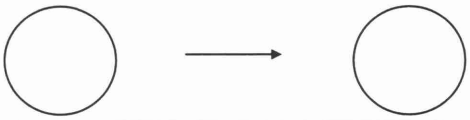
①　家庭人としての自分　　②　社会人および職業人としての自分　　③　個人としての自分

例）　＜現実の自分＞　　＜理想の自分＞



⇒　例）を参考にして，下記の円上に線をひいて，３つの面に分けてください。

＜現実の自分＞　　＜理想の自分＞



Presented by Medical*Online

表2　育児不安尺度に関する質問項目と回答の分布

%

質問項目	選択肢 よくある	ときどきある	ほとんどない	まったくない
子どものことでどうしたらよいか分からないときがある	10.4	64.5	23.1	2.0
子育てに失敗するのではないかと思うことがある	8.5	55.3	29.8	5.8
この子がうまく育つかどうか不安になることがある	10.4	58.4	25.9	5.2
子育てに自信がないと思う	8.5	55.9	32.0	3.3
子どもをどう育てたらよいかわからないことがある	8.5	52.2	33.8	5.0
子どものことで，イライラすることがある	32.3	58.0	8.7	0.9
子どもをうまく育てていると思う	4.4	65.1	27.1	2.1
自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感がある	8.1	30.4	44.1	16.9
子育てのために，毎日毎日同じことの繰返ししかしていないと思う	15.4	45.2	31.7	7.8
子どもを育てるのに我慢ばかりしていると思う	6.4	47.0	38.4	8.2

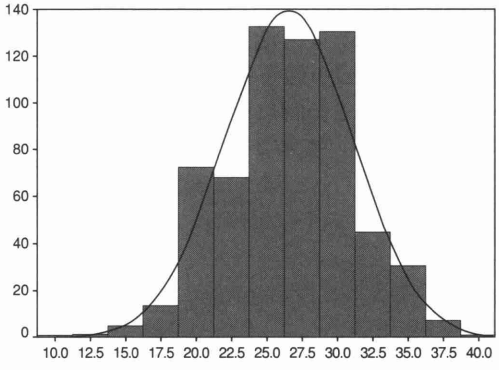


図1　母親の育児不安得点の分布

年代の労働力率が6割以上を占めていることから比べると，就業していない母親の割合がかなり高い集団であるといえる。

また，育児不安尺度の質問項目内容とその結果を**表2**に示した。この尺度の信頼係数（α係数）は0.85であった。育児不安得点は，最小値11から最大値39までの間に分布し，平均値が26.6±4.6（平均値±標準偏差：以下同様）であった。正規性はみられないが，左右対称形の得点分布をしており，大きな偏りはなかった(**図1**)。

2. 自己の3側面の現実・理想別構成割合の比較

母親たちが，自らの持つ3側面を，現実の生活ではどのようなバランスで捉え，理想として

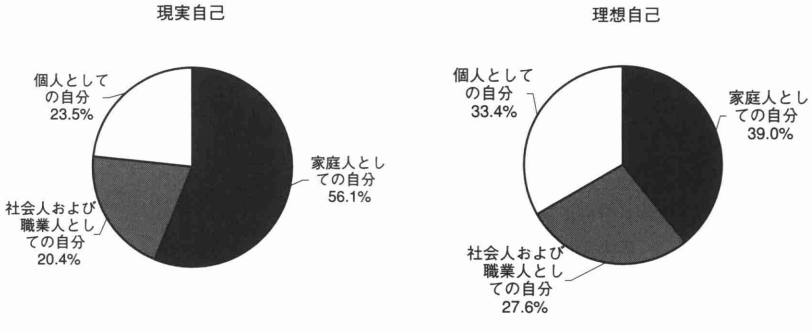


図2　母親の自己の3側面における現実自己・理想自己別構成割合

Presented by Medical*Online

表3 現実自己・理想自己別構成割合の比較

自己の3側面	現実・理想別	平均値±SD	F値	有意確率
家庭人としての自己	現　実	56.1±17.8	458.310	0.000***
	理　想	39.0± 9.5		
社会人および職業人としての自己	現　実	20.4±14.9	107.743	0.000***
	理　想	27.6± 9.0		
個人としての自己	現　実	23.5±12.7	278.554	0.000***
	理　想	33.4± 8.1		

***：p<0.001

はどうありたいかの構成割合に，どの程度のギャップがあるかを分散分析により比較検討した。

結果をみると，母親たちは，現実自己の構成割合では，「家庭人としての自己」が56.1%と5割を上回り，「社会人および職業人としての自己」が20.4%，「個人としての自己」が23.5%に留まった。一方，理想自己の構成割合では，「家庭人としての自己」が39.0%，「社会人および職業人としての自己」が27.6%，「個人としての自己」が33.4%であった（**図2，表3**）。

3. 自己の3側面の現実・理想別構成割合の差の正負と育児不安得点との関連

3側面それぞれの構成で，現実自己の構成割合が大きい場合と理想自己の構成割合が大きい場合とでは，意味が異なると考えた。そこで，3側面それぞれの現実自己と理想自己の構成割合の差を「負の群」と「正の群」に分け，2群間の育児不安得点の平均を分散分析により，比較検討を行った。

手続きとしては，まず3側面それぞれ理想自己の構成割合から現実自己の構成割合を引いた差の平均値，標準偏差を算出した。つぎに，より際立った値を分析に用いるため，「最小値」から「－1SD（標準偏差）」までを「負の群」，「最大値」から「＋1SD（標準偏差）」までを「正の群」とカテゴリーに分け，分析に用いた（**表4**）。

結果（**表5**）は，「家庭人としての自己」では，

表4 現実自己・理想自己別構成割合の差の統計量

自己の3側面（理想自己—現実自己）	平均値	標準偏差（SD）	分散	最小値	最大値
家庭人としての自己	−17.2	±17.7	314.57	−69	40
社会人および職業人としての自己	7.2	±15.4	236.57	−65	64
個人としての自己	10.0	±13.0	168.19	−57	50

表5 差（理想自己－現実自己）の正負2群間における育児不安得点との関連

自己の3側面（理想自己—現実自己）		n	平均値±SD	F値	有意確率
家庭人としての自己	負の群	98	28.0±4.6	9.107	0.003**
	正の群	64	25.7±4.8		
社会人および職業人としての自己	負の群	101	26.2±4.7	3.608	0.059
	正の群	86	27.5±4.7		
個人としての自己	負の群	92	26.5±4.6	4.799	0.030*
	正の群	105	27.8±4.2		

*：p<0.05　**：p<0.01

Presented by Medical*Online

「負の群」が「正の群」よりも育児不安得点が有意に高かった。つまり，理想自己と比較して，現実自己の構成割合が大きいと認識している母親たちの育児不安得点は高く，理想自己と比較して，現実自己の構成割合が小さいと認識している母親たちの育児不安得点は低いことが明らかとなった。逆に，「個人としての自己」では，「負の群」が「正の群」よりも育児不安得点が有意に低かった。つまり，理想自己と比較して，現実自己の構成割合が大きいと認識している母親たちの育児不安得点は低く，理想自己と比較して，現実自己の構成割合が小さいと認識している母親たちの育児不安得点は高いことが明らかとなった。また，「社会人および職業人としての自己」では有意差がみられなかった。

4. 自己の3側面の現実・理想別構成割合の差の絶対値の大小と育児不安得点との関連

差が正負を示すことに関わらず，その差の大きさに注目して，現実自己と理想自己の構成割合がかけ離れていればいるほど，育児不安得点の平均に有意な差が生じると仮定した。そこで，3側面それぞれの現実自己と理想自己の構成割合の差の絶対値を「大きい群」と「小さい群」に分け，2群間の育児不安得点の平均の差を分散分析により，比較検討を行った。

手続きとしては，まず3側面それぞれ理想自己の構成割合から現実自己の構成割合を引いた差の絶対値を算出した。つぎに，より際立った値を分析に用いるため，「最小値」ゼロから「－1SD（標準偏差）」までを「小さい群」，「最大値」から「＋1SD（標準偏差）」までを「大きい群」としてカテゴリーに分け，分析に用いた（**表6**）。

結果（**表7**）は，「家庭人としての自己」では，「大きい群」は「小さい群」と比較して，育児不安得点が有意に高かった。つまり，現実自己と理想自己の構成割合の差がかけ離れていればいるほど，母親たちの育児不安得点は高く，現実自己と理想自己の構成割合の差が小さければ小さいほど育児不安得点が低いことが明らかになった。同様に，「個人としての自己」でも「大きい群」が「小さい群」と比較して，育児不安得点が有意に高いという結果になった。一方，「社会人および職業人としての自己」では有意差がみられなかった。

Ⅳ. 考　　察

1）自己の3側面の現実・理想別構成割合の比較

「家庭人としての自己」と「社会人および職業人としての自己」，「個人としての自己」の3領域すべての，現実自己と理想自己の構成割合

表6　現実自己・理想自己別構成割合の差の絶対値の統計量

自己の3側面（理想自己―現実自己）	平均値	標準偏差（SD）	分散	最小値	最大値
家庭人としての自己	19.5	±15.2	232.19	0	69
社会人および職業人としての自己	13.6	±10.2	103.99	0	65
個人としての自己	13.4	± 9.6	91.11	0	57

表7　絶対値（理想自己―現実自己）の大小2群間における育児不安得点との関連

自己の3側面（理想自己―現実自己）		n	平均値±SD	F値	有意確率
家庭人としての自己	小さい群	98	25.0±4.3	19.027	0.000***
	大きい群	111	27.7±4.6		
社会人および職業人としての自己	小さい群	103	26.2±4.6	2.106	0.148
	大きい群	102	27.2±4.9		
個人としての自己	小さい群	98	25.2±4.6	16.927	0.000***
	大きい群	110	27.7±4.2		

***：$p<0.001$

Presented by Medical*Online

の平均の比較において有意差がみられ，母親たちが現実自己と理想自己の間にギャップを感じながら，日常生活や子育てを行っている実態が明らかとなった。

全体としてみると，「家庭人としての自己」の構成割合が，現実は56.1%を占めているが，理想としては39.0%に減らしたいとしている一方，「社会人および職業人としての自己」，「個人としての自己」における理想の構成割合では，現実よりも増やしたいとしている。つまり，若干「家庭人としての自己」が多いものの，この3側面それぞれ同程度の割合で3等分されることを理想の構成割合としており，現代女性の「母として」，「妻として」と同様に「個人として」生きたいという志向がみてとれる。

この結果は，柏木[4]の指摘した，「かつて（明治時代後半から大正時代）の女性と違い，子育て後の長い人生を視界に入れ，多くの選択肢から自分に合った生き方を選ぶということは，女性にとって母親以外の生き方の選択肢，つまり私個人としての生きがいや目標への関心を強め，今日の女性の高学歴化，社会進出とともにより一層個人化志向が強まる方向にある」を支持するものである。

2） 自己の3側面の現実・理想別構成割合の差の正負と育児不安得点との関連

「家庭人としての自己」の「負の群」が「正の群」と比較し，有意に高い育児不安得点を示したことは，現実が理想を上回り，家庭人として多くの時間を割かれていると認識している母親たちが，育児に対する負担感やイライラ感を抱きやすく，育児不安が喚起されている結果と考えられるであろう。また，「個人としての自己」の場合，「正の群」が「負の群」より，有意に高い育児不安得点を示したことは，現実が理想を下回り，もっと個人として生きたいと意識しながら，実現できていないと認識している母親たちが，閉塞感や焦燥感を覚え，育児不安が喚起されている結果といえるのではないだろうか。

また，有意差がみられなかったが，「社会人および職業人としての自己」においても，「個人としての自己」と類似する傾向がみられ，同様の推察が成り立つと考えられる。

3） 自己の3側面の現実・理想別構成割合の差の絶対値の大小と育児不安得点との関連

「家庭人としての自己」と「個人としての自己」の「大きい群」が「小さい群」と比較して，有意に高い育児不安得点を示したことは，理想のありたい姿と現実の生活に大きなギャップを感じながら，近づけることができていない現状から，母親たちに葛藤が生じ，育児不安が喚起されている結果を示すと推察される。

4） 今後の課題と支援のあり方への提言

本調査の結果から，現代女性の意識の変化に伴い，母親自身，母として生きることのみでは，ありたい自分の姿とは異なり，個人として生きることへの志向が高まっていることが明らかとなった。しかし，日本社会における女性の生き方の根幹は未だ家庭生活を中心として捉えられる傾向が強く，女性の生き方に対する意識の世代間格差も大きく存在している。また，実際にそのような画一的な生き方を求められることによる葛藤を抱えた多くの母親たちの，多様な女性の生き方を支える社会のしくみが備わっていないということも現状であろう。

今後，育児不安に対する支援を検討する際に，母親たちが人生の中で，「子どもを産み育てること」をどのように意味付け，価値付けているかに注目することが重要である。そして，「ひとりの人間として，女性として，生きたい」という母親たちの声に，もっと真剣に耳を傾け，家庭内や地域社会において，理想自己の構成割合の多様なあり方が受け入れられ，現実の自分との差をなくしていけるような柔軟なしくみづくりが求められている。

山崎[6]も，「母親として以外の自己」の充実を受容している家族と生活している女性の自己概念は調和しており，受容できない家族と生活している女性の自己概念は，葛藤していたという結果から，女性の母親として以外の自己の充実を家族が受容できるような看護者の関わりの必要性について示唆している。

重要な点は，「子育て」が「個育て」となり，母親の自己実現につながる重要な要素として，

Presented by Medical*Online

個々の生活の中で，結びつけられることである。

つまり，母親が自らの力でライフデザインし，さまざまなサポートを得ながら，現実の生活をマネージメントできる能力を獲得できるように支援していくことが，今後の育児支援のあり方の基盤となるのではないだろうか。

V. ま と め

母親が現実の自分と母親が望む理想の自分のあり方にギャップがあると捉えているほど，特に，現実の「家庭人としての自分」の構成割合が理想を上回っていると認識していればいるほど，現実の「個人としての自分」の構成割合が理想を下回っていると認識していればいるほど，育児不安に陥りやすい，喚起されやすいという傾向が明らかとなった。今後，社会全体で「子をもつ」，「親になる」ことの意味や価値について，改めて問い直し，母親の多様な生き方が認められるような体制づくりを進めることが課題である。

なお，本稿の一部は第50回日本小児保健学会にて発表した。

文　献

1) 牧野カツコ．乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉．家庭教育研究所紀要　1982；3；34-56.
2) 柏木惠子．子どもという価値　少子化時代の女性の心理．中公新書　2001.
3) 田中昭夫．幼児を保育する母親の育児不安に関する研究．乳幼児教育学研究　1997；6；57-64.
4) 柏木惠子，若松素子．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．発達心理学研究　1994；5；72-83.
5) 厚生労働省．「平成14年版　厚生労働白書」．ぎょうせい　2002.
6) 山崎あけみ．育児期の家族の中で生活している女性の自己概念―「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析―．日本看護科学会誌　1997；17；1-10.
7) 目黒依子，矢澤澄子．少子化時代のジェンダーと母親意識．新曜社　2002.
8) 川井　尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，中野恵美子，恒次欽也．育児不安に関する基礎的検討．日本総合愛育研究所紀要　1993；30；27-39.
9) 野澤みつえ．親業ストレスに関する基礎的研究．教育学科研究年報　1989；15；35-56.
10) 田中昭夫．保育園児の母親への育児援助に関する基礎的研究―その蓄積的疲労兆候と育児不安を軽減するために―．保育学研究　1994；32；107-115.
11) 大日向雅美．「親としての発達」．児童心理学の進歩　1991；30；154－179
12) 八木成和．乳幼児をもつ母親の育児不安に関する研究―育児観と育児へのサポートとの関連について．IBU四天王寺国際仏教大学紀要　1999；32；63-76.
13) 輿石　薫．育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究―予期不安尺度と期待感尺度の作成―．小児保健研究　2002；61；686-691.
14) 輿石　薫．母親の自己注目傾向と育児不安について．小児保健研究　2002；61；475-481.
15) 青木まり，松井　豊，岩男寿美子．母性意識から見た母親の特徴―ライフ・ステージ，自己評価，充実感との関係から―．心理学研究　1986；57；207-213.
16) 彭　潤希，佐藤龍三郎，福渡　靖．未婚女性の結婚・出産・育児・介護および就業に関する意識―とくに女性の家庭内役割と結婚意識の関連―．「厚生の指標」　2001；48；26-32.
17) 川井　尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，安藤朗子，中村　敬，谷口和加子，佐藤紀子，恒次欽也．子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成．日本子ども家庭総合研究所紀要　2000；37；159-173.

Presented by Medical*Online